



給食会だより

第124号

〔公財〕川崎市学校給食会



〒210-0004 川崎区宮本町6番地（明治安田生命ビル4F）

TEL 200-3298,3300 FAX 222-1442

第40回川崎市小学校学校給食教育研究協議会

平成29年1月18日（水）午後、会館とどろきにおいて、第41回川崎市小学校学校給食教育研究協議会が開催されました。この研究協議会は次のような主旨や経緯の中で行われているものです。

子どもの健康な心身を育てていくためには、「生きる力」の源の一つである食生活を見直し、よりよい食習慣が身につくような食育の推進を図っていくことが急務とされています。本市の食に関する指導については、文科省より出された「食に関する指導の手引」を参考にしながら、生きた教材である学校給食を有効に活用しつつ、栄養教諭・学校栄養職員による関連教科や特別活動等の授業への参加が進められています。

また、川崎市立小学校給食教育研究協議会は、学校給食の目的を達成するために、「食に関する指導」における諸問題を協議し、今後の指導の改善充実に資することを目的としています。

主催者（川崎市立小学校特別活動研究会 橋谷由紀副会長、川崎市立学校栄養研究会 室賀俊二会長、川崎市学校給食会 山田雅太理事長）と来賓代表（川崎教育委員会事務局健康教育課 北村恵子担当課長）のあいさつで始まりしました。あいさつの中では、自校献立に係る児童の作文（1年生）の紹介があり、子どもたちが抱く給食への熱い思いが伝えられました。また、「子どもたちの笑顔」を共通の糧にして、三者で力を合わせて進む必要性が述べられました。

主催者と来賓のあいさつの後、川崎市立学校栄養研究会の横井千春栄養職員（所属 川崎市立日吉小学校）の発表がありました。

川崎市立学校栄養研究会では「学校給食を通して、望ましい食習慣と豊かな心の育成をめざして」を研究主題にして、研究に取り組んでいます。今回は、

体と心の健康について自ら考え、進んで実践する子どもの育成をめざして
「きゅうしょくのやくそく」～児童向け給食指導～

というテーマでの実践報告でした。

「社会環境の変化に伴う食生活の乱れは、児童の健康問題に深刻な影響を及ぼしている。健全な食習慣は、学童期において確立することが重要である」との立場から指導の改善を試みている。

学校栄養研究会では「食に関する指導の全体計画」「食に関する指導 年間指導計画」を作成し研究を進めている。学校スタンダードの必要性が学校生活のあらゆる場面で求められているが、給食指導においてもスタンダードが必要と考える。児童の実態・発達段階、学校の実態はいろいろあるので、この方法がベスト（他には無い）というものではないが、1つの学校で1つの学年で教室ごとに指導内容や、配膳方法が異なっているのは、子どもたちが混乱するのは当然である。発達段階によってアレンジされていくにしても、基本となる一本は、学校で統一されている必要がある。

今回は、給食指導の場面を「身じたく・準備」「配膳」「食事中」「後片づけ」の4つの場面に分け、それぞれ写真やイラストを用いた資料で1年生に指導した。また、他学年には朝の会で「きゅうしょくのやくそく」についてのテレビ放送を行い、全校への浸透を図った。必要に応じて、写真やイラストの常設掲示も作成した。

指導講評の中、総合教育センター高橋徹指導主事からは、「日本の給食は食べることを意図している訳ではない。食という場面は、協同・協働の大切さや清潔・健康への配慮の大切さなど、子ども同士が交流する中で学んでいく恰好の場面である。」との講話がありました。また、本日後半の講師、渡辺雅之准教授からは、「例えば『熱いものや重たいものは先生が運びます』とか、『よく噛んで食べましょう、パンはちぎって食べましょう』とある。これらは先生が子どもたちに伝え徹底したい内容ではあるが、これだけでは、大人から与えられたものになってしまう。ここで『なぜ熱いものや重たいものは先生が？』『なぜよくかんで？パンはちぎっ





て?』と話し合うことで、子どもたちが自ら創出したものへと変化し、子どもたちに一層浸透する」とのサジェスションが添えられた。

考えよう！子どもの心身の発達と大人の役割

大東文化大学 教職課程センター 渡辺雅之准教授

冒頭、「ヒトは弱い存在である。でも、弱いてそんなに悪いことですか?」との問から入られ、「ヒトは弱い存在であるがため、補填しあうことを学んだ。助け合うというアイテムを獲得したからこそ、生き延びられた。」とくくられた。

1階で開催されていた「学校給食図画コンクール展覧会」の作品にも触れ、「作品は大きく2つに区分できる。配膳場面と食事場面だ。配膳場面では、真剣な眼差しが表現され、食事場面は楽しい雰囲気が表現されていた。正に給食は、子どもの社会性を学ぶ恰好の場である。」との思いを述べられた。

本題である「子供の発達と自立とは何か(○)～大人の役割(★)」では子どもを「乳児期」「幼児期」「少年期」「思春期」「青年期」の5つに区分し、各ステージでの、子どもの状況と大人の接し方を提言されていた。

「乳児期」：全能感…自分の要求に全て応えてもらえる時期

○赤ちゃんは自分がほほ笑むことで周囲が笑ってくれることを学ぶ。自分が他に働きかける最初の一步。

★「保護者」による保護とケアが大切。→これがなければ、他と関わる第一歩の経験なしに成長してしまう。

「幼児期～少年期」：安心感～信頼感…自他の分離や文脈形成を学ぶ時期

○「イヤダ、イヤダ」と駄々をこねて、思いを通そうとする。

★表現方法を言い換える「他者」→「嫌だじゃありません、言うことを聞きなさい」では、進歩しない。～したいんだね?～が嫌なのかな?と言葉を言い換えて、子どもに思いの伝え方の手法を獲得させる。

「少年期」：精神的自立の第一歩…遊び仲間と関わりあう時期

○友と群れて活動するので、多くのトラブルに遭遇する。このトラブルが、解決力や折り合いをつける力を身に付ける大切な機会となる。

★優しく見守り、解決力を獲得するアシスト

「思春期」：文化・友達・他者～大人・自立 第二の誕生の時期

○子ども(自分)の中にある「もう一人の自分」を見つける。

★子ども(自分)の中にある「もう一人の自分」に語りかける。

★思春期言語翻訳装置を獲得する→「うるせー」「別に」「めんどくさい」の言葉の裏にあるもう一つの意味

「青年期」：社会的自立へのフライト…愛される対象から愛する対象へ

最後に、日本とドイツの高校生の対話が紹介された。世の多くの大人にも聞いてほしい言葉である。

日：「難民は怖くないんですか? (難民で避難してきてもテロなどの暴力に走ることもある)」

独：「リンゴ1個片手に避難してきた人たちに手を差し伸べないなんて人ではない。彼らが暴力的な行為を行ってしまうのは、避難してきたのに心の安寧・安心できる生活を享受できていないからだ。」

1月27日(金) 第3回公益財団法人川崎市学校給食会理事会 開催

議題：第8号議案 平成29年度学校給食用物資納入業者の追加選定について

第9号議案 「公益財団法人川崎市学校給食会債権管理規程」
に基づく債権放棄について

第10号議案 臨時評議会に開催について

報告：第3号報告 理事長並びに専務理事の業務執行報告について
が審議され、承認されました。

